

創作子どもSF全集 1

孤島ひとりぼっち

矢野 徹・著／梶 鮎太・絵



矢野 徹

孤島ひとりぼっち

国土社 1968

110 P. 21 cm × 19 cm

(創作子どもSF全集 1)

基本カード記載例

© 創作子どもSF全集 1

孤島ひとりぼっち

初版印刷 一九六八年十二月二十日

初版発行 一九六九年一月十日

定価四八〇円 (検印廃止)

著者 矢野 徹

発行者 長宗泰造

印刷所 株式会社厚徳社

発行所 株式会社国土社

東京都文京区目白台一 一七ー六

電話 (九四三) 三七二一 (代)

振替 東京九〇六三二一

乱丁、落丁の本はおとりかえします

孤島ひとりぼっち

矢野 徹・文

梶 鮎太・絵





もくじ

あらしの海……………6

無人島上陸……………16

日本からの放送……………28

ひとりぼっちの順……………38

ロボットの箱……………48

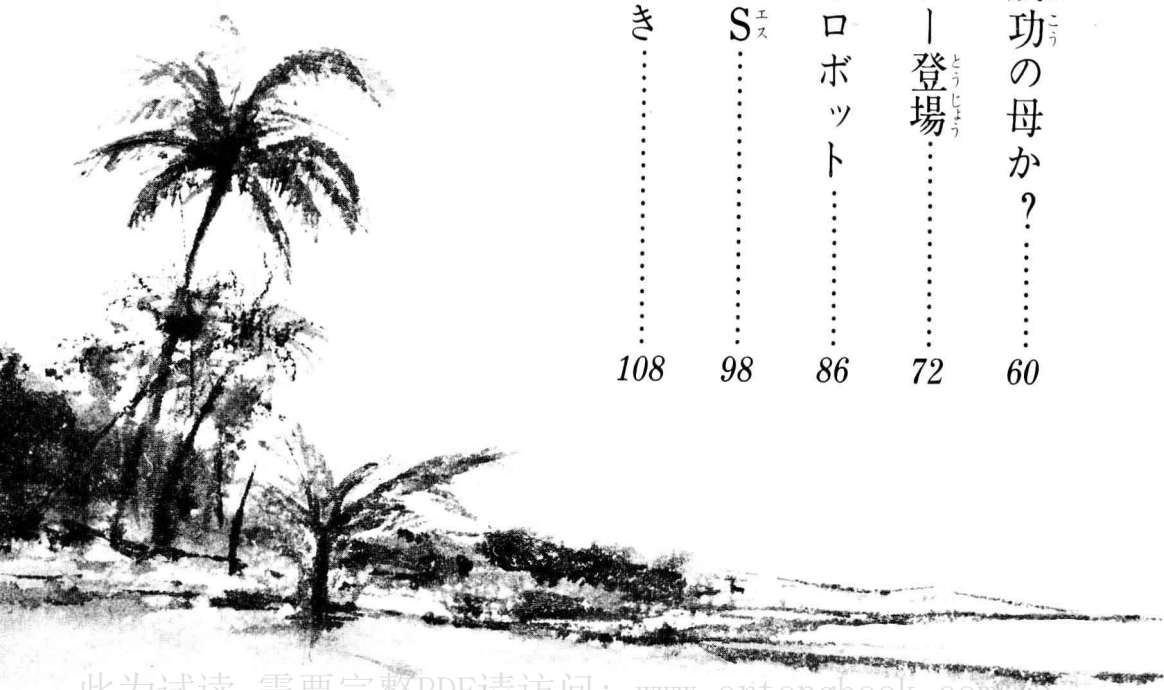
失敗は成功の母か？……………60

フライデー登場……………72

おかしなロボット……………86

S・O・S……………98

あとがき……………108



著者紹介

文／矢野 徹

一九二三年、愛媛県に生まれる。
中央大学法学部卒業。

英・米文学の翻訳とSF、時代
小説など少年読物の創作に従事。

（この『孤島ひとりぼっち』も原
形は、坂田治の別名で雑誌「少年」
に掲載しました）

住所 東京都国立市北二の三の五

絵／梶 鮎太

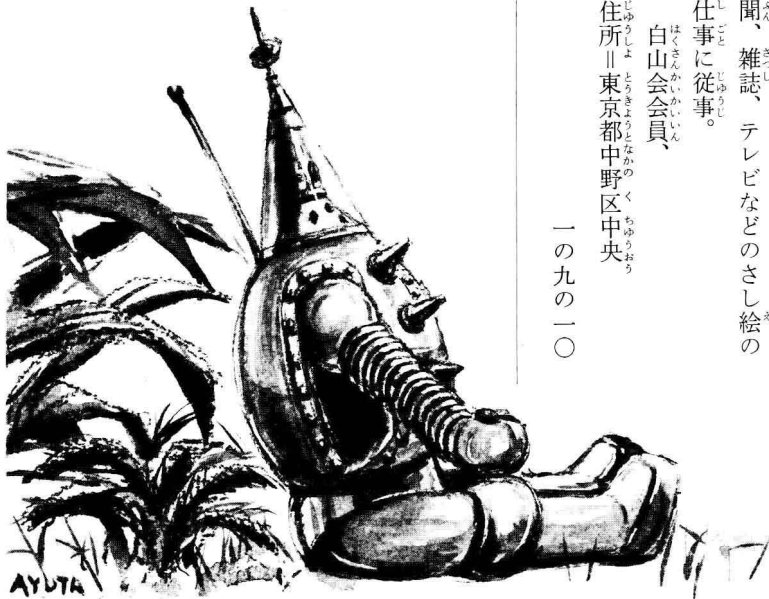
一九二七年、広島県に生まれる。
武蔵野美術大学油絵科卒業。

長く高校の教師をしたのち、新
聞、雑誌、テレビなどのさし絵の
仕事に従事。

白山会会員、

住所 東京都中野区中央

一の九の一〇

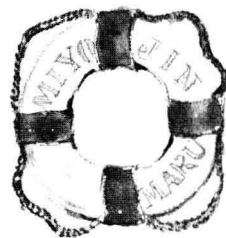


子どもはしかられてばかりいる。なにも知らないし、あそぶことだけがすきで、勉強はきらいなのがふつうだ。しかし、ひとたびまけるものか、がんばるぞと心をきめたとたん、子どもの未来は大きくひらける。

わたしはこの小説で、ロボット・フライデーをはなし相手とした少年を書いた。だが、あなたにもフライデーはいる。それは、いろんなことを教えてくれる本だ。たくさんの本を読んで、げんきに生きていってほしい。



あらしの海



ビューン、グオーン、ドッシーン、メリメリメリ。いろいろな音がつきからつきへ、おそろしいほどの大ききで鳴りひびいていた。南シナ海を台風がふきまくっているのだ。

「こわいなあ……」

順はぶるつとふるえた。そして、あれくるう風と、山のような波が船にぶつかってくる音に耳をすませた。船はぐらりとかたむき、順はベッドからころげ落ちそうになった。

銅鉄でできた船なのに、ほうほうでメキメキといやな音がひびきつづけている。大自然の力のほうが強すぎるのだ。

順がのっている明神丸は二万五千トンもある大きな貨物船で、ロンドンに向かっているところだ。機械だっていちばん新しいものを、なにからなにまでそ



なえていると、おとうさんはいつていた。それなのに、まるで木の葉のように
ふりまわされているのだ。

むかしの船についている機械というと、霧の夜でも、はねかえってくる電波
で遠くの海岸や船がわかるレーダー、遠くの放送局からやってくる電波で船の
いるところがすぐにわかるローラン、コンパスにつながれて自動的にかじをと
る機械、それぐらいのものだった。

でも、明神丸は最新式で、なにからなにまで機械がやってくれるフル・オー
トマチック船だ。海図でゆくさを決めたらさいご、そのとおりに進んでいく
ことになっている。でも、風や波の動きがあまりはげしすぎるので、船はまっ
すぐ進むこともできないようだ。こんなときは、やっぱり船長や乗組員の腕が
たいせつということになるのだろう。

「おとうさんが船長なんだもの、これぐらいへいきだぞ！」
と、順は大声をはりあげた。

大きな声をだしてじぶんをはげましたかったのだ。でも、あらしのほうかも
っと大きな声でどなりかえしたようだった——なんだとう！ ひっくりかえし

てやるぞう、と。

そして同時に順は壁にあたまをぶつけて、いたいっと、さけんだ。ゆうべの
ごはんのときも、ボーイさんはテーブル・クロスに水をまいて、おさらがす
べらないようにしていた。でも、いまのようなひどいゆれかたとは、くらべも
のにならなかった。

ズッシーン！

すさまじいいきおいで波が船のよこっ腹をたたきつけ、ふなべりをとびこし
て、船のなかにながれこんできた。谷川のようににはげしく廊下をながれた海水
がつきあたりの壁にあたり、ザブーンと反対側へもどり、順のいる船室のなか
へもながれこんできた。

「水だ！」

順は青くなつてさけんだ。

そのときドアがとつぜん開いて、一等航海士の清水さんが首をだした。当直
がおわったので順のようすをみにきてくれたのだらう。

「だいじょうぶだよ、順ちゃん」

「清水さん、水が……」

「へいき、へいき。まわりは水ばかり、すこしははいってくるさ。これぐらいのあらしなんか、びくともしないよ……それに、おとうさんが船橋ブリッジにいるんだからな、日本一の船長せんちょうがね」

清水さんがそういつてニヤリとわらったとき、船は大きくゆらぎ、順はまたベッドのうえてころがった。いままでにないひどいゆれかただった。

「きやーっ！」

順はベッドからほうりだされ、床にあたまをたたきつけられた。気をうしなうまでの一瞬、順はこの世のものともおもえないほどのすさまじい音を聞いた。

ドッカーン！

床がひどいきおいでとびあがり、順をまた壁にたたきつけ、床のうえをころごろところがした。ドアの下からながれこんでくる海水がときどき順の顔をあらった。それでも順は目をさまさなかった。風はうなり、波は船体をたたきつけていた。

それからどれぐらいたったろうか、順のまわりを白い霧がつつみはじめた。



順じゅんの心はまっくらな夜空のようだったが、そのなかで星ほしがひとつひかり、またひとつあらわれた。順じゅんは深い水みづのなかからうかびあがろうとするかのように、両手りょうてをそっと動うごかした。ながいねむりからさめる夏の朝のように、順じゅんは気がつきはじめた。

ぐーっと、まわりが大きく動うごいた。順じゅんはあたまをぶつけまいと、われしらずあたまを両手りょうてでだきしめた。

「いたいっ！」

順じゅんはふっと目をさました。両手りょうてを目のまえにもってくると血ちがついていた。からだか、ふわふわゆれていた。

風かぜと波なみの音おとはだいぶ静しずまっている。だが、日本しゅつぽんを出帆しゅつぽんしてからずっと感かんじつづけてきたエンジンのひびきが、いつのまにかしなくなっている。

「へんだな……」

順じゅんは首くびをふってみた。耳みみがどうかなってしまったのかと思ったのだ。すると、風の音がひゅーっと聞きこえ、ドアの下から風かぜがふきこんできた。

順じゅんは床ゆかに手てをついて起きあがった。からだじゅうが、ずきずきといたかった。

「あ……」

清水^{しみず}さんがたおれているのに気づいたのだ。あたまから血^ちがながれている。首^{くび}をへんなふうにまげたままだ。壁^{かべ}か机^{つくえ}のはしにたたきつけられたのだろう。順^{じゆん}は清水航海士^{しみずこうかいし}のかたをゆすぶってみた。

「おじさん！」

だが、清水^{しみず}さんはこたえなかった。まるで死^しんでいるみたいだ。床^{ゆか}のうえを右へ左へゆっくりと動^{うご}いている水が赤くそまっている。

「だれかきてえ！」

大声でさけびながら、順^{じゆん}は廊下^{ろうか}へとびだしていった。

「わあーっ！」

順^{じゆん}はぞつとして立ちどまった。廊下^{ろうか}の右側^{みぎがわ}はある。だが、左側^{ひだりがわ}をみると、廊下^{ろう}のつきあたりがぼっかりとあいており、山のようにうねる荒波^{あらなみ}がみえているのだ。これまでならクリーム色の壁^{かべ}があつたところに海がみえ、そこからひどい風がふきこみ、波^{なみ}のしぶきがそれにのって順^{じゆん}にたたきつけてくる。

「きやーっ！」

順じゆんはまた大声をあげた。気がくるいそうになった。明神丸みょうじんまるはまんなかから、すつぽりと切れ、前半分がなくなってしまうているらしい。

「おーい！」

どこからか、だれかの声が聞きこえてきた。

「おーい！」

と、順じゆんもさけびかえした。

「だれかいるのかあ？」

廊下ろうかをはしる水のなかを、順じゆんは右のほうへ進すすんでいった。

「いるよう！ たすけてえ！ たいへんだあ！」

